

新約聖書の中の奥義 第2回

□この学び全体のアウトライン

第一部 イン트로ダクション

第二部 奥義としての神の国

第三部 教会に関する5つの奥義

第四部 イスラエルが頑なになることに関する奥義

第五部 サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義

□第一部「イン트로ダクション」のアウトライン

- A) 「奥義」という用語の定義
- B) 「奥義」という用語の使用
- C) 「奥義」の概念に「ミステリオン」が使われた理由
- D) 「奥義」という用語を使っている聖書箇所概観
- E) 「奥義」に対する妨害
- F) 「奥義」の理解
- G) 「奥義」の数

□第一部 イン트로ダクション・・・本日は、その後半、E から G までを扱う

前半での内容の中から、特に重要なポイントを二つ挙げると・・・

「奥義」の意味・・・ギリシヤ語の「ミステリオン」。新約聖書の中でこの用語は、特別な神学的用語として使われている。「旧約聖書においては全く啓示されていなかったが、新約聖書において初めて明らかにされたこと」を意味する。旧約聖書で知られていたことであれば、それはミステリオンではない。(マタイ 13:35、ロマ 16:25～26、I コリ 2:7、エペソ 3:4～5、エペソ 3:9、コロ 1:26)

「奥義」の啓示・・・使徒たちと新約時代の預言者たちに与えられた(エペソ 3:4～5)。それゆえ彼らは新約時代の教会の土台となり(エペソ 2:19～22)、新約聖書を書き記すことになった(エペソ 3:1～11)。特に使徒パウロは、神の奥義の管理者(I コリ 4:1)という特別な役割を負った。

E) 「奥義」に対する妨害

1. 神が「奥義」を啓示した際には、同時にその奥義に対する妨害や反対もまた存在することが明らかにされた。
 - (1) 福音書では、イエスが最初の奥義を明らかにした。マタイ 13 章、「奥義としての王国」についてである。同時に、この中のマタイ 13 章の 3～7 節、そして 18～22 節では、サタンが特にこの王国に対して妨害をしかけてくることも教えられた。
 - (2) 「奥義としての王国」に対するサタンの妨害
 - ① 不信者に対して・・・不信者に働きかけて、福音を拒否するようにさせる。
 - ② 信者に対して・・・信者に働きかけて、信仰の成長を阻もうとする。その方法は二つ
 - 信者のまわりを取り巻くいろいろな状況に関心を引き付ける
 - 誤った教えで惑わしたり、活動や体験を追いかけさせて、信者を神のことばから遠ざけようとする
 - (3) サタンだけでなく、この世も、奥義全般に対して反対する。
 - ① I コリ 2：6～8 「私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとり悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう」
 - ② この世は、奥義を受け入れることはしない。それを認めず、反対する。なぜなら、世はそれを悟らない＝理解できない、からである。
2. 実際に、使徒パウロは、奥義を語ったために、牢に入れられた。
 - (1) エペソ 6：19～20 「私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるよう、私のためにも祈ってください。私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。」
 - (2) コロ 4：2～4 「私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。また、私がこの奥義を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるよう祈ってください。」
 - (3) 使徒パウロが牢に入れられていたのは、彼が福音を宣べ伝え、奥義を語ったからである。福音宣教は、初歩的な教え、すなわち「神に対する信仰・・・死者の復活、とこしえのさばきなど基礎的なこと」（ヘブル 6：1～2）を宣べ伝えるところにとどまらない。福音宣教は、旧約聖書では啓示されていなかった奥義を宣言することにつながる。それが「福音の奥義」（エペソ 6：19）である。
3. サタンは、自らも二つの奥義をもって、神の奥義に対抗する。
 - (1) 不法の奥義・・・II テサ 2：7～8 「不法の秘密【奥義】はすでに働いています。

しかし今は引き止める者があって、自分を取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現れますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」

- ① サタンの奥義は二つ、そのひとつが「不法の奥義」である。不法の奥義はすでに働いている。神の奥義に対抗している。
 - ② 不法の奥義が行き着くところは、不法の人（＝反キリスト）の登場である。
 - ③ 反キリストの登場自体は、奥義ではない。旧約聖書においては、反キリストという用語ではなく、「おまえの（サタンの）子孫」（創3：15）、「来るべき君主」（ダニ9：26）などの表現で預言されていた。
 - ④ 奥義と言えるのは、彼は「不法の人」であること、すなわち権力掌握が合法的ではなく、不法であるということ。よって、たとえばナチス・ドイツのヒトラーは、反キリストではない。ヒトラーは合法的に総統の地位に就いたからである。
- (2) 奥義としてのバビロン・・・黙示 17：5 【直訳】「彼女の額には、ある名が記されていた。（それは）「奥義、大バビロン、淫婦たちと地上のすべての憎むべきものたちの母」、黙 17：7「すると御使いは私にこう言った。『なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘儀【奥義】と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘儀【奥義】とを話してあげましょう。』」
- ① サタンの奥義の二つ目は、「奥義としてのバビロン」
 - ② これは、偽の宗教システムであり、大患難期前半期においてバビロンに本拠地を置く世界統一宗教の出現を預言するものである。
 - ③ これは神の奥義、特に「奥義としての王国」におけるサタンの妨害活動の結果である。サタンが蒔いた毒麦（偽の教師や偽の信者）、多くの鳥（サタンと悪霊たち）が巣をつくる（住みつく）までに巨大化し、富と権力をもって繁栄しているかに見える豪壮な宗教組織である。
4. 神の奥義に対する妨害は、最終的には破壊される
- (1) 黙 10：7 「第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」
 - ① 黙 11：15 第七のラッパが吹き鳴らされる。天で天使たちの予告の声
 - ② 黙 15：1～16：21 七つの鉢のさばきが地上に下る。「神の激しい怒りはここに窮まる」（15：1）。
 - ③ 七つの鉢のさばきの期間は、大患難期の後半（3年半）。この神のさばきのあと、地上はどうなるのか。それは、黙 11：15 で第七の御使いがラッパを吹き鳴らしたときに天で予告されたことが成就する。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される」
 - (2) 神の奥義は、最終的には、サタンの妨害を破壊する。サタンの二つの奥義を打ち破り、そのあとに、神の王国が地に建てられるからである。
 - (3) 「神の奥義が成就する」＝神の奥義がサタンの奥義を打ち破り、神の王国が地に建てられること

F) 「奥義」の理解

1. 「奥義」について、この世（の人々）は理解することができない。では、誰がどのようにして理解するのか？

(1) マタイ 13：10～17

- ① 11 節「あなたがた（弟子たち）には、天の御国の奥義を知ることが許されている」 不信者たちには理解されない。しかし、信者にだけは、理解できるようにされる。
- ② さらに言えば → 12 節「持っている者はさらに与えられて豊かになる」 信者の中でも、喜んでそれを聞き、理解しようとする者が、理解できるようになる。

(2) 奥義に関わる人々の 4 つのカテゴリー（I コリ 2：6～3：30）

- ① 2：14「生まれながらの人間」（共同訳では「自然の人」）
 - 救われていない不信者
 - 2：7～8 「この世の支配者たち」は、不信者である。彼らは、奥義を悟らない。
 - 2：14 彼らには、奥義は愚かなことである。また、彼らには奥義を悟る能力もない
- ② 3：1「キリストにある幼子」
 - 信者になったばかりの人
 - 神のことばの中でもミルクの部分は理解することができるが、まだ奥義を理解するまでには成長していない。奥義は、神のことばの「堅い食物」（2 節）だからである。
- ③ 3：1「肉に属する人」→【直訳】「肉的な人」（共同訳では「肉の人」）
 - 3：3「あなたがたは、まだ肉に属している【まだ肉的である】」
 - 救われて信者になってかなりの時間が経過していて、本来であればミルクから堅い食物を受けるようになっているはずなのに、そうでない信者
 - 成長していない信者。まだ、神のことばの中のミルクの部分を必要としている信者
 - 信者であるから、奥義を理解する能力は持っているが、理解しようとしていない。奥義を知りたいという願いや動機に欠けているからである。
 - 神のことばの堅い食物を受けつけないので、成熟もしていない。信仰の大人になっていない。
 - このような信者が求めるのは、神のことばではなく、この世のこと（富や名声）や体験（いやし・奇跡）を通して、気持ちが満たされること。
- ④ 2：15「御霊を受けている人」、3：1「御霊に属する人」 訳し方は違うが原語は同じ→【直訳】「霊的な人」（共同訳では「霊の人」）
 - 2：11～13、15～16
 - 奥義を理解する信者

- このような信者は、神のことばを学ぶ時間をつくろうとして、必要な努力や工夫をする。そして、神のことばを忍耐強く学び続ける。一言で言うと、自己訓練する信者である。
 - このような信者は、聖霊によって教えを受ける。
 - このような信者は、神のご計画について、今の時代における神のプログラムと将来における神のプログラムにきちんと分けて理解できる。
 - このように理解できることが、「神の深みまで及ぶ」(I コリ 2:10) ということである。
2. 信者は奥義を理解できるようになるためにどうしたらよいのか・・・3つの聖書箇所
- (1) イザヤ 8:16、19～20・・・「おしえとあかし」 神のことばを学び、それに従うこと
 - (2) I コリ 4:6・・・人々の注目を集めそうなこと、肉的なこと(富や名声を求める)、そして体験(いやし・奇跡)を求めるような方向に傾かないこと。パウロはここで警告している。「書かれていることを越えない」
 - (3) II テモ 3:12～4:4・・・ここには5つのポイント
 - ① 3:12 迫害を受ける
 - 迫害を耐え忍ぶこと
 - ② 3:13 だましに注意
 - 肉的なこと(富や名声)や体験(いやし・奇跡)を求めないこと
 - そのようなことばかり求めていると、悪人や詐欺師たちにつけ入れられて、だまされる。
 - 悪人や詐欺師たちは、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちていく。そのような悪に巻き込まれないようにしよう
 - ③ 3:14～17 学んで確信したところにとどまる
 - だまされないようにするためにも、聖書の教えの中にとどまることが大切である
 - ④ 4:1～2 みことばを宣べ伝える
 - 学んだことを適用すること。それは、学んだこと、神のことばを宣べ伝えるということである。
 - それが、キリストの弟子として歩むべき道である。
 - ⑤ 4:3～4 健全な教えを受ける
 - 偽教師たちが横行する時代になる。地上の教会が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、偽教師たちを集めるようになる。そして、真理から耳をそむけ、作り話にそれていくような時代になる。奥義を理解するためには、健全な教えを学ぶこと(4:3～4)

G) 「奥義」の数

1. 新約聖書の中には、奥義は全部で10。そのうち、8つは神の奥義、2つはサタンの奥義である。
2. 8つの神の奥義は、次のとおり

(1) 奥義としての神の国

- 「神の国」は、5つの層から成る多層的な構造をしている
- そのうち、4つは旧約聖書においても明らかにされていた
- 5番目の層が、新約聖書で明らかにされた奥義である
- 詳しくは、次回に扱います

(2) 七つの星と七つの金の燭台の奥義

教会に関する5つの奥義

(3) からだの奥義

- ユダヤ人信者と異邦人信者を新しいひとりの人に造り上げる＝メシアのからだ＝教会

(4) 内住のメシアの奥義

(5) メシアの花嫁としての教会についての奥義

(6) 信者の変換の奥義

(7) イスラエルが頑なになることに関する奥義

- イスラエルの不信仰は旧約聖書で預言されていた。イスラエルが頑なになること自体は奥義ではない。
- 異邦人が救われることも預言されていた。
- ここでの奥義は、イスラエルが頑なであるのは、教会に属する異邦人信者の数が満ちるまでのこと、という点である。

(8) 七つの究極的なさばきの奥義（これにより、サタンの二つの奥義が打ち破られる）

3. 2つのサタンの奥義は、次のとおり

(1) 奥義としてのバビロン

(2) 不法の奥義

以上により、第一部のイントロダクションを終わります。

次回、9月からは、8つの神の奥義と2つのサタンの奥義を、一つひとつ、取り上げて学んでいきます。

今回は、「第二部 奥義としての神の国 第1回」です。数回をかけて、神の国の5つの層と、奥義としての神の国 について、学ぶ予定です。